せたかむい
発行・古平町史編纂室
文化会館☎42-2590
第199号・平成18・4・1

年表で読む 古平の歴史

［104］

畜産業

牧畜業 ②

明治一八年、大股鉱山（大井嘉蔵と猪股五平が発見し、後の稲倉石鉱山）で発掘が始まったことから、その鉱石や資材運搬のために駄馬が使用されるようになり、馬の飼育が急激に増加した。

さらに明治二二年、北海道鉱山会社が稲倉石鉱山で金・銀・銅などの鉱石を採掘して馬で海岸まで運搬するようになると、輓馬が急に増加し、明治二三年には五三頭になった。

西舘謹爾の談話として、「明治二二年頃、新地町金毘羅神社の祭礼に草競馬が行なわれた。神社前から、新地町の道路を浜まで走らせた。町の人は軒下で見物し、発走から決勝までは、中央の屋根の上でなければ見られなかった」

北海道では明治一二年から、「牛馬売買規則」によって、牛馬を売買した時には売買届を出さなければならなくなった。

そして明治二七、八年の日清戦争が始まると、馬は戦地での武器・弾薬の運搬や騎乗などで、軍事用として重要視されるようになり、それまでの在来種に替わって洋種の馬の飼育、繁殖が奨励された。

明治三〇年になると陸軍省からの規則によって、馬を飼育している者は市町村長に届を出すほかに、検査を受けなければならなくなった。届書には、性別・年齢・用役（乗用、輓馬、駄馬）・体尺・毛色を記載した。

明治三二年には、沖村で七頭、沢江村で二頭、浜町や港町ほかで四八頭、合計で五七頭とあり、運搬や農耕に使われていたが、放牧場がなかったので年中小屋で飼っていた。

明治三六年「牛馬籍規則」ができて、牛馬も出生届（名前・種類・性別・毛色・特徴・産地・生年月日など）を出すことになり、売買の時には除籍届を提出しなければならなかった。

馬除籍届

名号　八千代
種類　和種
性　牝馬
毛色　栗毛
生年月日　明治四十一年六月十三日
対価　二十五円

右本月二十三日古平郡古平町大字浜町百番地佐藤吉助へ売渡し度候に付此段及御届候也

明治四十四年六月二十四日
古平郡古平町大字浜町百三十番地
工藤富五郎

これらの書類は後に、牛籍簿・馬籍簿として、町役場で保管するようになった

明治四二年、牛馬や一般家畜の改良と畜産業の発展を目指して、余市・古平・美国・積丹の四郡の人達によって、余市外三郡畜産組合を組織した。

明治四四年、稲倉石鉱山が休山したことから鉱石の運搬がなくなり、それまで増えていた馬の飼育数がほぼ止まったが、鰊漁の好漁や、それに伴う物資の輸送で輓馬の使役は減ることはなかった。

大正六年、それまで休山していた稲倉石鉱山を、函館の国屋忠五郎が買収して再びマンガンを採取販売した。その運搬に輓馬が必要となり、馬の飼育数がまだ増加し、大正八年には一九〇頭を数えたが、洋種は一頭で、雑種が一一三頭、内国種が七六頭という内訳であった。

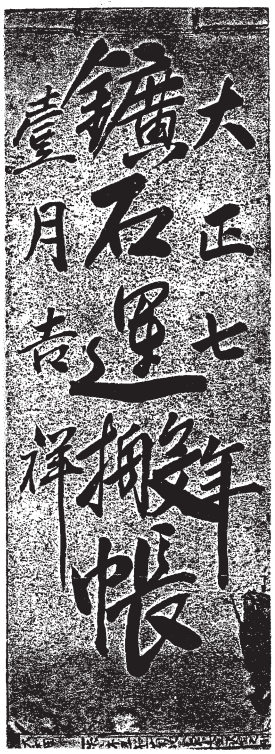
明治八年には垂美村（港町）二頭、入船町一頭とわずか三頭し

か飼育されていなかった馬が、この年に最高の飼育数となった。

しかし第一次世界大戦後、また稲倉石鉱山が休山したため馬の需要が大きく減り、大正一〇年には八七頭にまで減少し、さらに大正一五年には四五頭になってしまった。

開拓に入植する人達も続いたことから、開墾のために農耕馬を飼育するようになり、農閑期はいろいろな輸送にも従事するようになった。

大正八年頃までは馬の飼育頭数も増えてきて、農閑期の放牧場が必要になってきた。そこで大正六年、沖村の米田惣太郎が自分でも乗馬を飼育していたが、沖村番屋の沢に三二〇町歩余りの払下げを受け、馬の放牧を引き受け牧場経営に着手した。



＊農家にとって鉱石運搬は、農閑期の恰好の現金収入であった。

大正一四年、道庁は町村の共同放牧地として、浜町奥の未開地一三〇町歩の売払告示をし、古平町も購入を勧められたが町には購入の意志がなく、町会（町議会）でも必要なしとされた。

◇競馬場の設置

馬の飼育頭数も増えてきて、大正二年同好者が集まり、八月一六、七日の二日間、浜町の土場（古平川を利用して木材を流し、その集積場＝現在の海洋センターグランド周辺）で初めての草競馬会が開かれた。土場の周辺に木柵をめぐらして走路を作り、お盆中の年中行事の一つとして大いに人気を集めた。

この草競馬に参加した馬のほとんどは輓馬か農耕馬で、特定の漁業家の持ち馬や、美国からも参加したという。参加した馬は一流・二流・三流のほか年齢別にも分けられたが、馬も人も馴れていないので発走が大変だったとある。

賞品席や見物の小屋も建てられ、万国旗で会場を飾り、優勝馬には各料亭からの賞金、また入賞馬には商店からの賞品がヤマと積まれ、一流の優勝馬には金メダルが与えられた。一流の部で、年齢により一頭しか出場しなかったが、その一頭が走って一等賞を得た馬もあった。

この草競馬は以後、毎年八月一五、一六日に開かれ、雨のときは順延し、他町村からも見物人が集まり四、五千人にもなったという。この草競馬が何時頃からなくなったかはわからない。

馬の飼育が盛んだったことから三上良知町長は、さらに農耕馬の改良・繁殖を図るために二歳馬を対象にして産駒品評会を行なった。審査は後志畜産組合が行ない、飼育管理がすぐれ、馬体の優秀な馬に賞状と副賞を与えた。

賞　状

富本甚三郎

中半血種　第二朝日号

一　等　賞

古平町第四回産駒品評会審査ノ成績ニ依リ之ヲ授与ス

大正十五年十月二十六日

後志畜産組合長　青山美乗

＜続く＞

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
〈110〉

大正一三年 ～ 続く

▼一〇月三〇日

昨日来の雪は今朝まで降る。夜中には吹雪いていた。朝起きて見ると一面の銀世界。こんなに降るとは思わなかった。これでは農園の49号もダメだろうと思うが、熊さんと天野さんがリンゴもぎに行く。私は未開地売払願いの件について役場へ行く。大勢の人が来ていて調査にもなかなか手間取る。正午昼食に帰り、二時頃また行き五時頃にようやく帰る。二日に実地立会いがあるとのことだ。仏壇がようやく出来上がった、掃除や修理をしたら新品同様だ。熊さんらが帰り、聞けばリンゴは昨日の雪では何事もなかったとのこと。全部もいで板倉に入れたとのことで先ずはよかった。夕方、雪はすっかり晴れたが道路はザクザクで悪い。

▼一〇月三一日

起床七時、朝の内は雨が降り道路も悪い。今日は天長節で祝日だ。父や吉治、トミは学校の拝賀式に行く。熊さんらはリンゴ選びだ。暖気なので雪も消えたが、道路はなお悪い。四郎は一日増しに元気が良くなった。太鼓を叩きヨーイ、ヨーイと大きな声ではやしている。

▼一一月一日

祝聖会の例会日、まだ薄暗い五時に起床、洗面後、支度をして出かける。町はまだ暗い。向かいの桶屋は電気の下で仕事をしている。今日はかなり早いだろうと思い行って見たら五人目であった。一〇分ほど休み、五時半から読経が始まる。朝早く起きて、広い本堂で一時間もお経をあげるのは精神修養上確かに良い。やがてボツボツ東の空が明るくなる景色が何ともいわれぬ。和尚の部屋でしばらく話す、聞けば近々中に、日本の名士、尾崎行雄先生の講演会があるとのこと。日本の名士の講演、実に意義深いものがあろう。帰って朝食後、倉へリンゴを入れていたら支庁から土地検査員が来て、急に本日検査するから来てくれとのこと、雨の中ワラジ掛けで出かける。〇、㊥、今井さんの畑を通り、私の畑を見て、一一時に終る。落葉松もずいぶん大きくなった。一時半、㋑公園の小屋で昼食をする。池も立派になり、周りの樹木もたくさん植えられ公園らしくなった。二、三年もしたら立派な公園になるだろう。二時に帰る。夜、直おっかさんの通夜に出かける、八時に終り帰ったが道路の悪いことひどい。

▼一一月二日

起床六時半、雨と風が激しく海は大時化になった。四郎は父さん大好き、目もすっかり覚めていないのに抱っこして浜へ行くという。おんぶして浜へ向かったが、沖風が激しく吹きつけあきらめて帰る。沖も白波が立って大荒れ、これでは余市通いもだめだ。熊さんはこの雨風でも農園行き、苗木の植付けとゴボウ掘りなどやる。大根の干したのを車で運搬する。私は一〇時頃直の葬式を送りに行く。道路が悪いのには閉口する、足駄では歩かれぬ、浜町方面より、港町、新地町の方が悪い。正午帰る。風はますます強く、店にいても風の音がドードーと聞こえる。

▼一一月三日

今日は珍しく天気快晴、随分と風は冷たい。六時起床、浜へ出て見る、ナギになったので共栄丸、勇丸が小樽行きの準備中、家でも岡崎行きの大根、㊥行きの青物、漬物、サバなど送るべく支度に忙しい。積丹行きの船もナギなので出るというので、リンゴを箱に入れ支度する。積丹から馬でリンゴ買いが来て五銭で二〇〇斤売る。リンゴもポツポツ売れていく。午後から農園へ行きリンゴを板倉に入れる。畑も作物は大抵取り入れ、樹々の葉も黄色くなり晩秋の景色となった。五時帰る。

▼一一月四日

六時起床、電気がまだついている。洗面後、久しぶりで海浜を散歩する。上ナギで景色もよい。学校前から禅源寺へ行きお参りをする。今日は亡き本老母の命日だ。老母からはずいぶん世話になったが、早逝ってから一四年にもなる。ブラブラ散歩しながら帰ったのは七時ちょうど、平素の起きる頃だ。朝食も運動の後はおいしい。九時、自転車で沖村へ行く、沖村の大謀ではサバ大漁、外に鮭、ヒラメ、ソイ、イカなどもとれたとのこと。大謀にイカとは珍しい。大謀の掛け一〇〇余円はあとからとのことで帰る。午後からは好天気を幸い、裏の薪を倉に入れる。そろそろ冬ごもりの準備だ。農園の仕事も大分終わり、樹にこやしをやっている。

▼一一月五日

起床六時、海岸を散歩して、弁天山へ登る。三角点まで行ったが四方の景色実によろしい。ここに神社でもあって、公園にでもしたらどんなに良いところだろう。見晴らしが良く、寒気の中清々する。大謀の船が発動機船に引かれて出て行く。朝の景色は実に良い。二〇分ほども眺めて下山、禅源寺へお参りし、七時過ぎに帰る。熊さんは午前中薪入れをする。私はリンゴ選びなどする、リンゴ二、三円売れる。夜、禅源寺の寺参りで妻、コノさん、ユキちゃん、子供達はお菓子などを持って大喜びで帰る。雨が切れ間なく降り道路が悪い。

▼一一月六日

起床五時半、今日は方向を変えて中央通りの方から畑通りに出て、田から支店の池の方まで行く。尾崎先生が九日に来られ、㋑別荘に泊まられるとのこと。道路の悪いところへ砂利を敷いている。自動車で来られるとのことだ。八幡の畑の高台から町を展望するのは気持ちよい眺めだ。帰りに畑に寄って見たが、作物の取り入れも終わり畑は広々としている。境界を定めねばならぬが、それには植林するのが良い方法だと思う。八時頃に帰る。新地の㊄の店員が死亡し、葬式があるので九時に行く。井さんに依頼した米一〇俵が今日着く。沖村大謀からまたサバを買い入れ、夜、サバ焼きをする。六時頃からかかり、一時半まで少しのヒマもない。

▼一一月七日

起床七時、昨夜はサバ焼きで一時半頃までやったので今日は朝寝した。天気快晴、青空の気持ちよい小春日和だ。私は昨夜焼いたサバを干したり、サバを編んだりし、のち倉でリンゴ選びをする。毎日一〇人くらいリンゴの客がある。妻はサバの煮干しをこしらえている。一時から禅学会例会があり行く、一四、五人が集る、修証義を読み、のち布教師の講話があり、有意義な講話であった。夕食の馳走があり、本堂で供養がある。修証義を唱え説教を聴く。お寺参りをし読経をしていると浮世ばなれの感がある。九時に供養が終わる。一〇時から勤倹デーに合わせて、祝聖会としての催しにつき協議する。一一時帰る。学校では今夜学芸会があるので家でも四人が行く。九時頃から雨になる。

▼一一月八日

起床六時、時々小雨が降るが割りと暖かい。熊さんと㊥は、石井さんから買ったリンゴ1号、千斤を運搬して倉に入れる。来る一〇日の勤倹デーを意義あるものにするために、道路補修をすることになった。いろいろと作業の方法などについて協議する。今夜六時から学芸会の第二日目、私も六時頃行ったが、千人余りの人だ。学芸会も一年ごとに進んで、今年は背景や電気装置など工夫をこらして見事だった。種目もいろいろあったが皆上手で良かった。劇は桃太郎、浦島などもあった。一〇時に終わり帰る。

▼一一月九日

起床七時、尾崎先生は本日来町、古平へ自動車が初めて来たので、子供等が珍しがって大騒ぎ、午後六時から講演会がある。久と役場へ行き橋板の材料を貰う。午後一時の富丸で尾崎先生がお出でになる。私はハシケのところまで出迎えする。尾崎先生は服装なども質素な方だ。学校で休まれ、関係者一同で記念写真を写す。自動車で㋑公園へ行かれた。六時から学校で講演会が始まったが、千人を超える聴衆

だった。「封建時代と立憲時代」という演題で、質問にも答えられた。一〇時に終わり帰る。

▼一一月一〇日

起床七時、今日は勤倹デーの第一日目、尾崎先生は午後一時の船で余市へ向かわれるが、時化で浜町からハシケが出ないので、新地からのハシケに乗られる。不便なことだ。夜、道路補修の件で、囚と臼杵さんとで本支店へ行きいろいろ話す。

▼一一月一一日

起床七時、今日は勤倹デーの第二日目で「貯金デー」である。六時には電灯が消えて時間励行を知らせる。祝聖会の催しで禅源寺の鐘も同時に鳴る。道路補修の件、義務人夫も出て明日から仕事にかかる。

▼一一月一二日

起床五時、祝聖会の記念鐘つきの日なので五時半に行く。会員八名が集り共同でつく。その後

本 農園へ樹を四本貰いに行き、鐘楼の周りに植える。後世までの記念樹だ。浜町から沖を見るとイカ漁の船の灯りがたくさん見え賑やかだ。

▼一一月一三日

勤倹週間の第四日目、私は今日祝聖会の記念鐘つき役なので、五時半に起床、早々に禅源寺に行く。町はまだ薄暗い、昨夜来の雪で町も山も真っ白だ。仏参して鐘楼に上がり、電気の消えるのを今か今かと待つ、六時電気が消えたのでそれと同時に第一声、ゴーンと力をこめて打つ、二〇秒おきぐらいに一三打つ。朝早く起きて力をこめて鐘を打つのは気持ちが良い。終わって和尚と記念植樹の話などをし、七時に帰る。

▼一一月十四日

昨日と一昨日は鐘つきで早起きしたので、今日は疲れて七時に起床。本 主人が松苗をくれるというので、熊さん、天野さんらと車を引いて農園まで行く。時々ボタ雪が降り道路もグチャグチャで、寒いので手足も冷たくなる。カラマツ三〇本、トドマツ二〇本、そのほか坪用(庭)にと一本、五〇本余りを貰い二回に分けて運搬する。ハイカラ山から掘った一本は七尺余りもあり、中庭に植えるつもりだ、よい記念になる。外の苗は農園の境界やそのほか坪式のものにして植えるつもりだ。

▼一一月一五日

今日は祝聖会例会日、昨夜から心にかかって早起きせねばと思っていたが、三時頃小便に起きて休んだらグッスリ寝込み、明るくなってから目を覚ました。飛び起きて、洗面後走って行ったが観音経は七分通り終わっていた。九月以来はじめての大失敗である。今後はこれにこりて注意せねばならぬ。七時に読経が終わり、別室で茶菓の馳走になりいろいろ話す。過日の尾崎先生の講演については新旧の思想に分かれていろいろと議論が出て、なかなかやかましいことだ。本 では阿部の畑から桜一一本、前の畑からオンコ七、八本を移植したが、大きな桜には人夫二五、六人かかっても大変だった。終わって記念撮影をする。本 の公園も樹がたくさん植えられ賑やかになった。四時帰る。夜、父は本 サワさんの通夜に行く、一八、九歳で亡くなり、若いのに可哀相なことだ。

▼一一月一六日

起床七時、今日は本 から貰った松苗を畑に植え付けるべく出かける、伞兄さんが手伝いに来てくれる。天気がよく暖かいのが何より幸いだ。いろいろ相談して、畑の入り口から両側に七本、外に池の周囲に八本、板倉の前後に五本、あとは仮植しておいて明年植え込むつもりだ。池は明年夏でも手入れして追々に良くするつもりだ。四時頃終わったがよい仕事をした。雪に押しかけられない内にすんで安心した。この日妻は本 葬式送り、父は忌中引きに行く。妻はまたこの夜、平田老母が死亡したので通夜に行く。

▼一一月一七日

起床七時、毎日運動しているので、ご飯もおいしく気分も良い。平田老母の葬式に妻が行く。私は熊さんと農園へ行き枝束ねをし、束ねたのを板倉に入れる、天気が良く幸いだ。午後から天野さんも来てくれたので八分通り束ね終える。この頃は日が短くなったこと、夏の頃の半分くらいしかない。三山神社の大川さんがかねてから多くの無尽をしてい

たが、今回とうとう継続できなくなったという。関係者の損害も五、六千円で大恐慌とのこと。

▼一一月一八日

昨夜は雨降りだったから今朝は雪かと思っていたら、幸い好天気になった。今頃の天気は一日でももうけものだ。熊さんは七時頃農園行き、私も八時に行き残りの枝束ねをやる。倉へ入れて残ったゴミなど全部燃やした、これで虫も巣も無くなりサッパリした。板倉の前にムシロを敷き、熊さんと弁当を食べる。塩サバのおかずだか、働いた後は何を食べてもおいしいものだ。午後から畑の境界にあるグスベリを掘り起こし植え替えした。明年からは手入れをしてよく生らせよう。バラも植え替えし、四時頃帰る。夜、父は高橋治助さんが死亡したとて通夜に行く。㊏主人が珍しく話しに来る。

▼一一月一九日

起床七時、今日も幸い好天気、私も八時から農園へ行く。アヤメ一〇株余り掘り、キキョウなどの株分け、植え替えなどをやる。午後も植え替えをやり四時帰る。夜、父は高橋さんの通夜に行く。私は㊏へ行き、佐渡の宗家のことについて話す。町内の某家では、債務のため家を整理するとのはなしを聞く。世の中だんだん不況で寂しくなる。

▼一一月二〇日

起床七時、昨夜来の雨は夜中から雪となり、起きて見れば遠山や屋根は白くなっている。朝食後、中村床屋で散髪す。高橋治助さんの葬式送りに行く。生前中はいろいろと人の世話をした人なので、送り人も多い。子供も多いが皆仕事を持ち、嫁に行っている人もいるが揃って元気でいる。このように互いに力になれるのは楽しみなものだ。しかし世の中いろいろで、㊍さんのように生活上の不足はないのに、多くの兄弟が皆早く亡くなるなどは心細いことだ。一族団欒ができるのが人生無上の楽しみだと思う。われわれもかくありたいものだ。帰って佐渡へ送るリンゴの荷造りをする。夜、菊池屋さんが来てリンゴの勘定をする。上の畑が二〇〇円ほどで六十円の経費、一四〇円の売り上げになった。夕食はうどんの馳走で一〇時休む。

▼一一月二一日

起床七時、朝から雨が降り出したが後雪になり、冬景色となる。町中は道路が悪く、いよいよ初冬の景色だ。店は閑散、たまにカレ網用品を買う客が来るだけだ。佐渡㊥から塩サバの注文があり、㊤から買ってもらう。一箱六〇銭で二箱買う。本年はサバが大漁でずいぶん安い。夜、太鶴間へ行く、いろいろ話し、無尽の問題について聞く。実に困ったものだ。

▼一一月二二日

起床七時、雨風で道路はなお悪い。私の家で新地山の上に畑三畝ほどあったが、大正五、六年頃、美国への道路開削の際、無断で七四坪取られ、残り三〇坪㊤に貸しているのを一昨年、新地学校敷地になっていることが判明、今朝、米田助役に交渉したところ、役場に手落ちがあったらしいとのこと、結局、相当価格で売ってもらいたいとの話であった。一〇時頃から雨風がますます激しく大時化になった。大謀網の破損も心配している。㊤積丹丸が一時危険であったとのこと。夜になって少し静かになった。古平町長欠員のところ、今回、後志支庁の朝岡精一課長に決定した由。

▼一一月二三日

起床七時半、昨夜来の時化や雪は、今朝になり二寸ほども積もり一面の銀世界、道路はザブザブになった。火災予防組合の経費五円、一条会は組員の怠慢でまだ集金をしていないので班長から注意があった。支店へ寄り帳簿調べ、正午帰る。みぞれになった。中庭に植えた松には雪が衣を着たように被われ、いっそう風情がある。トミらは学校が休みで、雪ダルマを作るとて一生懸命だ。

▼一一月二四日

今日午後から、原田さんと火防組合の集金をする。某店でも、昨年の海産物大暴落のため大負債を蒙り、今回整理せねばならぬとて、仲買人達が来て畑地、宅地などが売りに出ている。人間の一生はわからぬものだ。

（続く）

春爛漫なのに

大澤文子

「いいなァー」　久びさに雲間より漏るる朝の光に、思わずひとり言。小庭を埋めつくした雪も日毎に低くなり、躑躅の小枝も雪を割り伸びはじめるのが目につく。

あーあの頃・・・春が来ると必ず海添いの崖下に、ひっそりと咲く淡い紫のカタクリを見つけにゆくわたし。「わァステキ」そして幾度か口をついてでるひとり言、なにかも忘れ淡い紫の花びらに触れ、まだ寒い崖下にしゃがみこむのだった。

今でもあの崖下に愛らしい花を咲かせているかなァと、心配な思いにかられることもある。カタクリの花言葉は「初恋」・・・とか。

野の花々が年々減りつつある・・・と、ある新聞紙上に書いてあったのを見たことがあった。観賞用として人々に採られてゆくのが原因の一つという。

春に咲く美しい花々は私達の心に潤いをあたえてくれるのに・・・。野に咲く花々がだんだん減ってゆくのは淋しい限りである。

いつの日か春の花々を短歌にうたったこともあったなァと、今更ながら懐かしく思いだすのだった。

私はこの頃、なんとなく自分のことをしみじみ考えることがある。病気らしい病気をするひまもないくらい、一日中コトコトと歩き廻っているわたし。

悪いくせで今のものは即、処理しなければ落ちつかない。誰かさんのようにのんびり何事も出来たらなァと、いつも思うが十人十色、考えても無理・・・とあきらめよう。

ペンを離さず持つのが、なんとなく前々からの癖であろう。いつか寂庵さまが書いておられたが、「疲れをいやすのには衝動買いが一番！」・・・と。でもそんなことを出来るはずがない。せいぜい近所の店先へ足を運ぶくらいであろう。

二、三日前だったであろうか。買物の帰りにふと近所の知り合いの方にお会いした。とけ気味の雪の脇道に立ち、しばらくぶりに話しあった。

「近々東京の方へ引っ越しますー」、夫婦共身体が弱いのでねェ、決心して看護つきの所へ行きます。現在の家もう買い手がつきましたのでねぇ、「ご挨拶もしないで近々越しますから・・・」とつけ加えられた。

「えっ、あんなにお元気だったのにねぇ、奥様も美しい方なのにねぇ」心の中で思ったが返事のしようがなく、私はただ黙ってお辞儀ばかりしていた。お元気で・・・の言葉も出ずに。

春の高空にむき桜の蕾もふくらみかけているのに・・・。何故か心の中にひろがりゆく悲しみは何故・・・。

ふとわれにかえり、原稿用紙に書いた文字、

「田中澄江氏、そして野上弥生子氏」共に私の尊敬する作家である。いつか田中澄江氏の講演会に出席したことがあった。氏は何事にも好奇心が旺盛！

趣味として年間五十回の山登り励行、現在八百回という。千回を実現したい、あと四年間で達成出来るという。

にこやかにほほえまれた氏に会場は一瞬すごい！　と、ざわめいた。千回達成を心から祈っていたが・・・果たして・・・。今でも心が病むのは何故・・・。

また野上弥生子氏は、「人は生きている間は何か仕事をしなければならない。私はほかの道を知らないのでこうして書き続けています」・・・と。九十七歳で眼の手術をする時も、家族の反対を押し切って手術に挑戦したという。

「読み書きもせず、何のためにいきるの」・・・というのが、野上弥生子女史の身上であった。

一日に原稿用紙二枚を必ず書き続けたという。白寿を祝う会にでも「とぼとぼ歩いているうちに、こんなにおばあさんになって途方にくれていますぇ」と語ったという。

そして、百歳まであと一カ月余りというところで倒れられたという。惜しい作家野上弥生子女史であった。

私は惜しみなく知的な作家として・・・そして心から尊敬する「田中澄江氏、野上弥生子氏」の名を挙げたい！

原稿を書きあげた夕べ、私は窓からもるる夕陽のもと、早咲きの黄の水仙を二輪、原稿の上に置いた。そっと・・・。

地方自治の移り変わり

―蝦夷地から北海道へ―

□市制町村制になる以前

昔はアイヌの人達が住んでいて「えぞが島」と呼ばれ、罪人が送られる流刑の地であった北辺の地が、幕末から、日本海と太平洋沿岸を中心とする漁業によって開発が盛んになってきた。

明治の新政府になると、一躍北方の新興の地として重要性が増し、**開拓使**が置かれ、**北海道**と命名されて地域の拓殖事業が行なわれるようになった。

北海道は日本の経済の発展につれて移民の増加や、本土からの資本が入って、多くの困難の中にあって次第に開拓が進んだ。

明治二一年（一八八八）、**「市制・町村制」**が公布され、翌二二年から全国に施行されることになったが、なぜか**北海道・沖縄県・指定された島などはこの制度から除外**された。

□北海道独特の制度

その代わり？　北海道ではこの市町村制とは別の制度として、それから一〇年経って**「北海道区制、一・二級町村制」**が公布された。しかし、どれもその後大改正されて、**区制と一級町村制**は明治三三年（一九〇〇）に施行となったが、**二級町村制**は全文が改正されうえで明治三五年（一九〇二）に施行された。

これらの法律は、公布されてから一〇年余り遅れたばかりではなく、一級と二級ではその内容もいろいろと異なっていた。しかもこの区制、一・二級町村制を施行できないという町村も多くあり、それらの地域では、今まで通りの**戸長役場**という制度が大正一二年（一九二三）まで続いていたのである。

では、どうして本州などでは町村制が施行されているのに、北海道では一〇年余りも遅れてようやく区制や一・二級町村制が施行されたのか。

「市制・町村制」が施行される以前にも、全国の地方制度についてのいくつかの法律はあったが、北海道にはその中の一つである**「郡区町村編制法」**だけが適用され（これによって**古平郡**となった）、関係する他の法律は適用されなかったからである。

北海道は市ではなく区という名称になり、**区は札幌と函館の二区**が指定されたが、函館区だけに**函館区会**（区議会にあたる）が開設されるという変則的なものであった。これは当時、函館が北海道では規模も大きく最も整った市街であり、人口一五万人余りで全道の約五五％を占めていたことにもよる。

それでは函館区以外の区・町村はどうかというと官選の**区長**、または**戸長**と、町村内の**総代人**（各町村から二名）による**総代人会議**によって、いろいろな問題が議決されていた。

先の函館区会の開設は、函館区民の運動によるところが大きかった。当時は「函館新聞」があり、自治権を求めて区会開設の論説が紙上を賑わしていた。

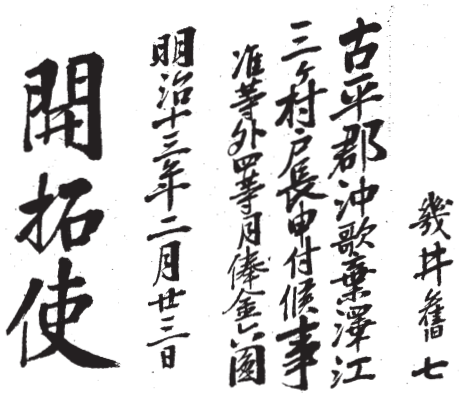
「区に区会あり、郡村に郡村会のあるのはその区、その郡村の幸福をはかるための会議であって、人民の義務である」など、住民の自治に対する主張が掲載された。

多くの意見は、どれも北海道への法律の適用が除外されたり遅れていることを、府県との格差であるとして、その是正を求めるものであった。

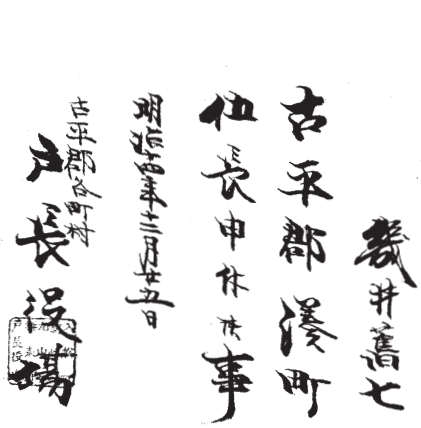
これに対して政府側は、**格差のあることが当然**であるという考えに立っていた。

「北海道のように開拓が始まったばかりのような土地では、なるだけ制度を簡易にしなければならない。内地と同様の規則は必要でないことは閣議でも認めている。それで、現在の法律の多くから北海道を除外しているのである」

こうして、**北海道の特殊な状況に見合った法律**の必要であることを強調している。従って、府県と同じ法律は北海道には合わないという考えから、府県と同



↑開拓使から戸長の任命
古平郡内には外に二人の戸長が任命され戸長役場が置かれた



←戸長による伍長の任命
各町内に伍長が任命されていたがこの関係はよくわからない

様な「区町村会法」を適用する方向には進まなかったのである。

このように北海道については、「市制・町村制」が施行される前から、**「内地との格差をなくしてほしい」**という住民の意見と、**「北海道の特殊な状況に合った法律」**という政府の考えとの相反するものがあった。

□国政選挙からも除外

明治二二年、**大日本帝国憲法**と、**衆議院議員選挙法**が公布されると、この問題はさらに熱を帯びてきた。

それは、選挙法に**「北海道、沖縄県、小笠原諸島は、この法律を施行しない**(現在は選挙権がないということ)」と、あったからである。

このことについて新聞には、この規定によって、「北海道の住民は、小は町村自治の権利から、大は国の参政権にいたるまで手にすることができないでいる。権利について言えば無能力者である」という意見も載っていた。

□市町村制と選挙

このような市町村制度の下では、国政への参政権も得られないということで、各地からいろいろと議論が起こった。

1．道内で市町村制を施行できる地域を、他の地域から分離せよ、というもので、勢力の強い函館地方に起こった。

「函館地方を北海道庁から独立させ、函館県という構想である」

2．分県はしないが、ある地域、または一部の都市に府県同様の制度を施行する。

3．北海道の全域に特別の制度を施行するというものである。

「北海道はまだ府県と同じ状況にはない。今多少の困難があり満足のいく制度でなくても、将来十分な自治を行なえるというのであれば、特別の規則を定め、とにかく自治の制度を施行することは必要不可欠なことである」

これらの中で、3の意見がその後の論議での中心となった。

□北海道庁の構想

道庁では拓殖事業の中に「町村組織」を取り上げていた。それは**札幌・函館・小樽の主要都市には市制、他の町村・部落には一級・二級町村**とする構想である。

「……今北海道に自治制を行なうとすれば、その**制度に階級を設ける**必要がある。財力の豊富なものは**市**、次ぎを**一級町村**、財力は弱いが部落の形をなしているものは**二級町村**とする。未だ部落の形をなしていない財力の弱いものは、**庁令をもってこれを監督**しなければならない」

ということは、二級町村の施行も困難な町村については、今までの**戸長役場制度**を続けることを考えていることになる。

これには、自治体としての自立と財政の問題があった。

「……一般に新しい町村においては道路、橋、排水・用水溝の建設、その他衛生・教育など公共の財政によるものが多い。しかし、新しい移民は自家の生活に追われ、町村財産を蓄積して、公共の事業をするなどは容易なことではない。もし町村が事業を拡大するようなことになれば、移民の税免除の期間が終り、税金を負担しなければならなくなったとき問題が起きることになる。」

札幌通信 第39信

今世の使命がある限り

吉川義雄

妻の死後、やたらにガランと広い家の中で、娘と二人での生活、その娘も用事が多く、外出した後の家の中は、まるで月世界にひとりで居るような寂寥感にさいなまれる。

そんなときに橘義春さんの亡くなったことを知らされた。古平小の一級下とはいえ、同じ丸山町で育ち、両家の父母達の付き合いも深かったせいもあり、群来村に近いわが家の畑の一部を橘家も使用していたりして、妙に親近感のある間柄であった。

『せたかむい』で、彼の健筆を毎回楽しんでいるだけで足りなくなり、直接のお便りも数回続いていた。入退院も繰り返していることも分っていたが……。

考えてみると、彼も私も歳の違いはほとんどない。八十四歳を迎えた私が、妻に先立たれてメソメソしている恰好なぞは、惨めで滑稽なのかも知れない。

そうこうしているとき、三日ほど前に電話が鳴った。何回もこちらから掛けても無駄だった。東京の斉藤嘉勝君の身内からだった。

またも訃報である。あれ程活発に文通やら、電話やらの交流が続いていたのに、ある時期から糸の切れたように、プツリと音信が途絶えていた。

入退院を繰り返していた、彼の愛してやまない妻、愛子さんの死去を、カスレたような声で私に電話してきたのは、今更オコル気にもなれぬ、三ケ月後のことであった。

何故……と。そのときの私には、一向に分らぬことでもあり、腹立たしいばかりであったことは確かだった。

古平時代から、彼等の恋愛を見守り、結婚まで応援をした。私もその一人であった。

戦後、彼との付き合いは永い。当時、それぞれの才を認め合った者達が、次第に相寄って『涛声文芸』をガリ版刷りした。色刷りの才を発揮してくれたのが、斉藤嘉勝君であった。

改めて振り帰ると、当時の誌友のほとんどが居なくなっている。斉藤清一君、三川正君、今また嘉勝君、つ多（後藤）さんも、千葉在住で文通があったが、それも途絶えてしまった。

やたらにやり切れなくなり、古平の春江（関川）さんのところに電話をする。

「あれェ：よっさん」が第一声である。彼女の、山口姓時代からの若さしか私の頭の中にはないから、お互いだが、声までその若さどおりに弾むようだ。

嘉勝君の訃報をネタに、何のことはない、八十歳と八十四歳の老人ふたりが、永々と旧交を温め合うこととなる。

人は環境、なかんづく多くの人々に護られて生きる。ひとりで、ここまで生きてきたと自負する人間が居るとしたら、思い上がりも甚だしい。

ふるさと古平の親兄弟はもちろん、思い出せば実に多くの人達が、私を育てて下さっているのに気づく。人だけでは：もちろん違う。海も山も草木も、流れも風も、総てが私を大事に、大切に育んでくれていたのだ。

報恩は、他の動物でも時に発起する。ましてや、この徳性を忘れたら、イヤでも人間でなくなる。

世界的な時代の暗雲は、原点である人間の徳性を忘れるか、幼稚な生死観に起因していることに気づく。

人が、人を殺戮して止まない時代なぞ、二度と再び合いたくない。

私に、まだ使命があるのか、愛して止まない人達が、私を残して次々と「さよなら」を告げてゆく。

馬頭観世音碑信仰

馬頭観音は、日本各地で信仰が盛んなようで、古平では昔から『馬頭さん』と呼ばれて、主に浜町方面にその信仰があった。

馬は農家では農作業用として、また専業業者もいて、漁獲物や鉱石の外、町内の物資の運搬や、旅客用の馬車や馬そり用としても飼育されていて、それらの人達からの信仰があった。

名前が『馬頭観音』であっても、これはなにも牛馬の墓というわけではないが、牛馬の供養塔でもある。『商売繁盛』や『子授け』『病気平癒』などなど、身近な願いごとをかなえてくれるというのが人気のある理由のようである。

そして、その時々に姿を変えて現れることから変化観音ともいわれ、六観音があるが、馬頭観音というのはその中の一体で、馬頭をいただくのと、人身に馬頭という姿がある。

観音さまはどれも優しい顔をしているが、馬頭観音だけは髪を逆立てて、ものすごい怒った顔をしている。また、頭の上に馬の頭をつけているのですぐわかる。なぜ馬なのかというと馬が草をむさぼり食うように、慈悲の心で人間の煩悩（ぼんのう）を食べ尽くすことを表しているからである。

ところが『馬頭』という文字から、後になって民間では、馬に関係して馬の病気や安全を祈願する観音さまとして、馬を扱う農家や山で働く人たちによってまつられ、信仰を得るようになった。

町内には現在三基の馬頭観音があるが、沖町の馬頭観音については由来がよくわからない。

特に本州方面では、古くから馬頭観音の深い信仰が根づいていて、ある農村での馬頭観音信仰にまつわる話がある。

「山の中には時空の裂け目のようなものがいろいろなところにある。それは、この世とあの世をつなぐ裂け目でもあり私たちの世界と闇の世界を結ぶ裂け目でもある。この裂け目は、誰かがそこで命を落とさなければ決して埋まらない。山で人が死ぬのはそうゆう場所である。

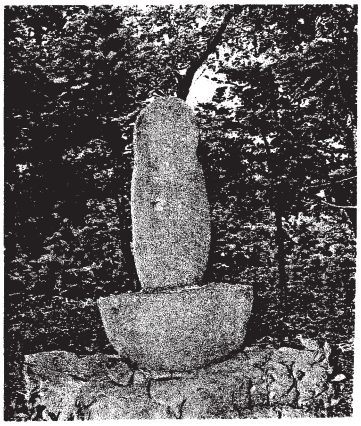
人にはその場所は見えないが、動物たちには見える。馬も山道を歩いているときなどに、この裂け目が気づくときがある。そのとき時空の裂け目を見ながら、人間がここで命を落とすことがないようにと、馬は場所で自らみを身を投げた。

こうゆうときでなければ、馬が山で死ぬようなことはない。人間は馬が死んではじめてそのことを知り、馬に手を合わせながら、そこに馬頭観音を建てた」

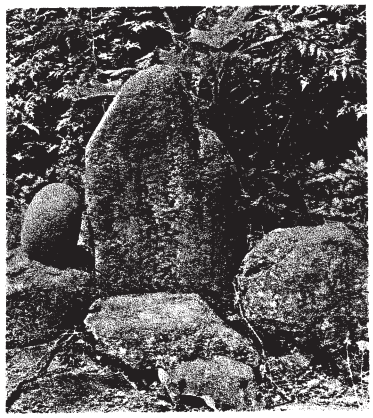
（岩波書店・図書「馬頭観音のある里」より）

余談だが夜、オリオン座を眺めると、と言ってもこれは専門家の話だが、オリオン座の付近には複雑に入り混じった星雲（多くの星があってそれが雲のように見える）があり、それがウマの頭のように見えることから馬頭星雲という名前のついた天体もある。

→ 明和地蔵堂横の馬頭観音



← 正隆寺薬師堂横の馬頭観音



→ 沖村地蔵堂前の馬頭観音

大学・専門学校創立費を寄付

古平町

北海道の開拓は国策として進められたが、教育は大きな課題を抱えていた。教育施設の拡充、教員の充実などすべての面で遅れ、明治二〇年代になってようやく整え始めた。

専門的な高等教育となると、明治四〇年代になってようやく創立期を迎えたのである。

小樽商科大学

旧学校制度のもとに作られた実務者養成のための高等教育機関で、現在の小樽商科大学の前身である。明治四三年（一九一〇）国立では全国で五番目の高等商業学校として設置され、翌年開校した。日清・日露の二大戦役を経て、国内の産業が飛躍的に発展する時期にあった日本が、時代の要請として産業人の育成を積極的に進めるため設けられた。就業年限は三年、最初の入学者は七二人であった。教育方針は実務教育中心主義で、あわせて実業人としての人格を養うことを目標とした。大正一五年、商業学校教員養成のための臨時教員養成所を併設したが、昭和五年に廃止した。昭和一九年（一九四四）、小樽経済専門学校と改称したが、昭和二四年（一九四九）、学制改革により新制大学として発足、商学部のみの全国でただ一校の商科大学として発展して来た。古くから〝緑丘学園〟として親しまれている。昭和二七年（一九五二）、小樽商科大学短期大学部を設置した。小樽商大＝北大定期戦は、大正元年（一九一二）以来の伝統行事として受け継がれている。

北海道古平郡古平町

小樽高等商業學校創立費トシテ
金四百貳拾四圓寄附候段奇特ニ付
為其賞木杯壹組下賜候事

大正元年八月十三日

北海道廳長官從四位勲三等石原健三

北海道大学

日露戦争のあと、北海道内における小学校就学率は九〇％を超えるほど普及した。庁立中学校も札幌・函館に続いて小樽・旭川と増えたが、卒業生が農科以外の上級学校へ進学するには道外へ行かなければならなかった。このため総合大学設置の声が高まり、明治四〇年（一九〇七）、札幌農学校が東北帝国大学の農科大学に昇格した。しかし、道民の願っていたのは総合大学の設置であったが、北海道では農科以外の学部が出来るという可能性が低いことから、まず大学になることが先決問題であった。

この間、北海道大学期成同盟などの国会への請願運動もあり、人口の増加と経済発展で単に農業だけではないという実業家達の要望もあった。

東北帝国大学農科大学は大正七年の大学令の改正で、医科大学を加えて北海道帝国大学として独立した。待望の帝大の誕生で、その後、工学部・理学部を加えて総合大学として発展する。

昭和二七年（一九二七）、戦後の学制改革によって帝国大学の名称は廃止され、北海道大学と改称する。現在は農学・医学・工学・理学・文学・法学・経済・獣医・教育・水産・薬学・歯学部が順次設置され、その他の研究機関も合わせ持つ国内有数の総合大学として重要性を増している。

北海道古平郡古平町

東北帝國大學農科大學創立
費トシテ金參百圓寄附候段奇特ニ
付為其賞木杯壹組下賜候事

大正元年八月十三日

北海道廳長官從四位勲三等石原健三

←→ 当時の慣行で褒状（賞状）か、その経緯については全く不明

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

〈41〉　橘　生き義　春　［遺稿］

八月十五日

敵戦車古屯に侵入　～続く

山家が周りに戦死者の銃でもないかと探してくれたらしく、ソ連兵が落としていった物らしい刃渡りが一〇センチ程の、柄が紅白のまだらの派手なナイフを拾って来た。

「橘さん、これで我慢して下さい」

「どうもありがとう」

戦友というものはありがたいものだ。いろいろと心配をしてくれる。このナイフでも役に立つかも知れないと雑嚢に収め、幌見峠に向かって歩き出した。

途中で、戦死した兵隊の銃と弾丸をいただいてホッとした。これで敵と遭遇しても戦える。夕方になって、あちこちから生き残った者が集まって来た。二五名ぐらいはいたようだった。大隊長も副官も戦死したという。

夜になるのを待って遺体の収容に出かけることになった。宵闇の迫る頃、古屯の兵舎が赤く燃え上り、弾薬庫が爆発して炎が夜空をこがすのを目の当たりにした。兵舎に収容されていた傷病者も焼け落ちた兵舎と運命を共にしたのだろう。地獄だったに違いない。それを思うと体が小刻みに震え、鬼気迫る思いがした。

夜になり二五名程を三班に分けて遺体の収容に出発した。敵の警戒網が厳重でなかなか円形陣地に近づけない。三〇メートル置きぐらいに敵の歩哨が立っているのが闇にすかして見える。敵の歩哨の間を抜けるのは非常に危険だ。一列縦隊のまま草の上に腹ばえになってじっとしていたら、眠くなってきた。考えてみるとこのところ満足に寝てないし、朝から何も食べてない。空腹と疲労が重なりそのまま敵前でぐっすり寝込んでしまった。

――戦　況――

★古屯：円形陣地より、大隊本部敵陣へ突入す。小林大隊長、岩貝副官、機関銃隊の浜田中隊長は壮烈な戦士を遂げる。やがて夜になり、少数の生き残りの将兵で大隊長や副官など、遺体の収容に円形陣地に向かう。わが軍の戦死者将校四名、下士官、兵が約一〇〇名、敵軍の死者約三〇〇名余り。

★北極山：敵は幌見峠方面より暗夜を利用して、七星山と北極山の中間地点より侵入し、わが第一中隊の守備している北極山へ砲撃を開始。砲撃に呼応して敵の歩兵部隊が来襲、敵は砲の支援のもとに、兵力をますます増強してわが軍を強襲して来た。砲隊の大隊長木下大尉と中隊長の鈴木中尉は、一個小隊を率いて率先して陣頭に立ち、手りゅう弾を投げながら敵陣に突入し、木下大尉、鈴木中尉と相次いで壮烈な戦死を遂げた。

※私と同郷の小学校の先輩、松岡外与造さんも、このときの戦闘で鈴木中隊長と共に戦場の華と散った。

八月十七日〔晴れ〕

逃避行を続け、

八方山へ到達する

昨夜から何時間ぐらい眠っていたろうか。目が覚めたら、辺りが明るく朝になっていた。円形陣地のすぐ近くだ。下の軍道を、ソ連軍の戦車が轟音をたてて走っているのが聞こえる。気がつくと、最後尾にいた私達五名を置いて、前にいた兵隊が起こすのを忘れて出発したらしい。ぐっすり眠っていた私達が置き去りをくったようだ。しかもここは敵の真っただ中、さあ大変だ、皆を起こしてすぐ出発した。私の気付くのが少し遅かったら、敵に発見されて皆殺しになるところだった。＜続く＞

崩落事故を悼む

瀧内優子

マスコミは崩落事故を津々浦々に報じて古平知れるも悲し
一縷なる望み断ちし指揮の乱れぞ遅々と進まぬ救出作業
逝きたるは多く老人の町古平ひとしほ悲しみ深し
遠くより電話手紙に寄せくるる人の情けは身に沁みとおる
事故のテレビに轟きわたる発破音我の頭の中つらぬきぬ
無惨にて判別つかぬ被災者の身元やうやく長靴に判る
慰霊祭にあそびの如く雪舞へり霊妙の語りあり死者の遊びか
崩落の無惨を多く見しゆゑに来向ふ春を切に待ち侘ぶ
何か覚悟のごとき気配感じつつ君をまともに我は見ざりき
夢でしか逢ひざる娘くり返し夢に顕ち来てはかなきと君は

編集雑記

▽立春も過ぎ、強い陽光や春の嵐で雪解けも急速に進み、広い地域を悩ました大雪も、もう話題にもならなくなりました。代わって新入生の姿がチラホラ？　見えるようになりましたが、今年の新入生は幼稚園一六名・小学校二四名・中学校三六名・高校一五名です。ちなみに昭和三〇年代の多いときは町内の小学校（中学校もほぼ同じ）で二四〇名を数えました。

▽新聞でもご承知かと思いますが、後志鰊街道普及実行委員会というユニークな活動をしている団体があります。名称の通り、「鰊」という共通の歴史的な背景をもつ市町村を結んで観光を取り上げ、地域の活性化を図ろうということです。

昨年九月、余市・古平・積丹をブロックとする集まりの報告書が出来て、その中で、古平俳句会会長の越野さんが、「鰊」の恩恵によって育てられた古平の文化として俳句を取り上げ、新しい視点から「鰊文化」というものを紹介されています。これでまた、鰊についての認識に一つの扉が開かれたようです。

▽『せたかむい』も来月の五月号が二〇〇号となります。節目として、頂戴した原稿やその他の記事で、ふだんのものより少しページ数を増やして発行したいと、早めに準備をしております。

それ以降のことですが、多くの資料もありますので、なるべくそれらの資料を基にした記事をご紹介したいと考えておりますが、日常の資料の収集や整理などのこともあり、思案中というところでもあります。

×　×　×

訂正　1から続く

6ページ目の次ぎの6～9ページは、7～10ページとなります。

7ページ（正しくは8ページ）の【地方自治の移り変わり】3段目の「**区は札幌と函館の二区**」とありますが、正しくは「**区は札幌・函館・小樽の三区**」です。

短歌

古平町岬短歌会

書の審査初めて受けし「和」の文字を卒寿記念にと壁に吊しぬ　池田テル

明け初めし清しき空に昇る日を拝するわが身心洗はる　金子寿子

美しき紅葉の里に一夜宿り「年金に感謝」を友らと語る　坂本信子

昨夜（よべ）の雪うっすら載せる庭の松孫らと眺む新しき朝　鈴木時子

遠くなり近くなりして漁火は波間にうつるそのすばらしさ　竹内コト

雪捨てに疲れた体癒さむと鍋を囲みて束の間和む　田中香苗

今朝も降るひとり居の人を思ひつつさあ頑張ろうと除雪の支度す　丹後初江

難病の妻がつひに叶はざりし娘（こ）の元へ行くこの正月は　寺田清治

幾年も相合ふこともなく過ぎし甥の写真の口髭の顔　東美知

寄る波の磯岩を打ち散る飛沫波どめを越ゆる時きらめけり　堀典子

俳句

古平俳句会

雪吊の縄一本のゆるみなく　斉藤波留

雪眼鏡伊達と見られて気恥かし　山口悦子

初硯祝ひ組文字福寿草　越野敏雄

咲き揃ふ水仙の香の匂灯来る　大和田絵伊

遅れ来し友の賀状に安堵して　高橋重子

除夜の鐘今年は居間で遠く聴く　仲谷比呂古

潮を読み風を読み取る漁始　室谷弘子

掌に降りては消ゆる牡丹雪　外山俊久

雪雲のたちまち空を傾ける　渡辺嘉之

笠雲の影おく雪のくきやかに　堀典子

日捲りの厚き重さに年明ける　本間寿昭

白樺に樹氷の光たわわなる　越野清治

古平町史年表

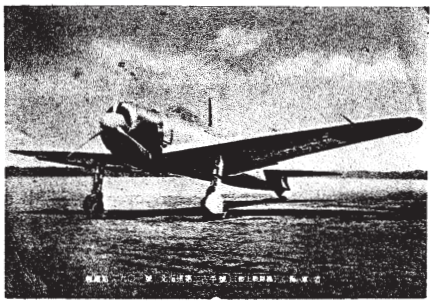
▲倶知安町の映画館布袋座の火事で208人が焼死
▲古平青年学校が一泊の宿泊をともなう２週間の特別訓練を行なう
▲米軍がアッツ島に上陸、日本軍守備隊約2500人が全滅する、古平町出身の戦死者も出る（5／29）
▲金属回収に協力し、古平国民学校では補助貨幣(円未満の金属貨幣)の回収を行なう、紙幣になる
▲女子青年勤労報国隊の出発式が学校で行なわれ、児童等が見送りをする
▲北海道食糧営団古平出張所が設置される
▲千歳飛行場建設挺身隊が動員される
▲大政翼賛壮年団が中島グランドの整備作業をする
▲魚類製品も町外への持ち出しには漁業会の証明書が必要となる
▲鳥取県で大地震が起き死者 1083 人、家屋全壊7485戸の被害が出る
▲有珠山麓で激しい地震が起き土地が隆起する、これが後の昭和新山である（12／28）

昭和１９年（1944）

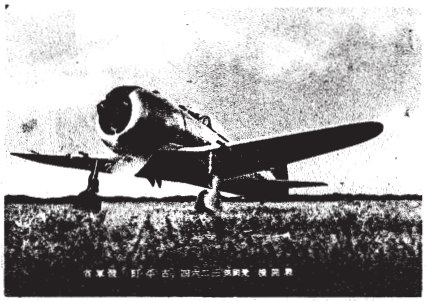
▲戦闘機（ゼロ戦）の献納式が古平国民学校で行なわれ、古平号と命名される
▲金属回収令により、金属製のボタンも回収され、木製や陶器製のボタンが市販される
▲町民の勤労奉仕により、チョペタンの沢に炭焼きのかまど造りをする
▲鰊が大漁となり、古平国民学校では５年生以上の児童が１０日間の臨時休業となる
▲余別登記所が古平登記所（新地町高台）に統合になる
▲翼賛壮年団が留寿都村へ援農隊として動員される
▲古平―小樽間運賃積み船の長栄丸が時化のため高島沖で沈没し、乗組員全員が死亡する
▲煙突の飛び火で浜町竹内薬店の天井裏から出火したが、近所住民のばけつリレーで消火する
▲金属回収で供出した二宮金次郎銅像の跡に、石像が設置される
▲稲倉石鉱業所が稲倉石から余市までの第３索道の建設に着手する（完成前に敗戦となり建設は中止される）
国内の金属類が不足し、ついには家庭のなべ・かまの類までが → 供出させられた、北海道庁に金属回収本部が設置される

碎玉隊部備守我の島タンア
傷病者は悉く自決
最後の猛突撃敢行
キスカ島は確保
北海道新聞

↑ アッツ島の「玉砕」を伝える北海道新聞（5月31日）



↑ 古平町が献納した戦闘機 愛国第二六四　海軍省



↑ 北海道第二古平号　陸軍省